

305. 「形」が変わる・「地面」が動く ～甲南町で採集された石器から～

はじめに

今回紹介する資料は、甲賀郡甲南町において表採された石器資料です。この資料は、現在の考古学における課題～例えば「変形論」という視点、あるいは「地形変遷史」を考慮した視点～を整理し、より正確な過去の歴史像を描くために、有益な情報を示すものと考えます。

そこで本稿では、資料の紹介と、そこから考え得る課題について整理してみたいと思います。

1. 甲南町で採取された石器～有舌尖頭器～

写真1に示したものが、今回発見された石器です。研究者の間では、「有舌尖頭器」あるいは「有茎尖頭器」と呼ばれている石器です。今から約13,000～9,800年前、縄文時代草創期と呼ばれる頃に作られ、基本的には狩猟具として、槍の先などに取り付けて使われた石器だろう、と考えられています。次頁の図1の★印の位置（甲南町大字新治字幕山）で、平成15年6月に甲南町大字新治在住の西村光夫氏によって採集されました。

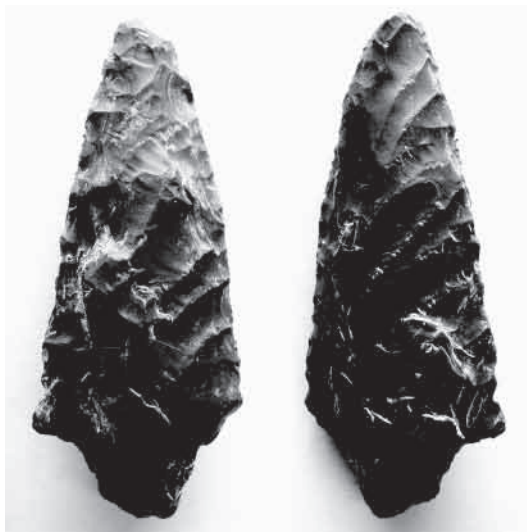


写真1 甲南町で採集された有舌尖頭器
(左：おもて 右：うら)

まずは、この石器を観察してみましょう。長さは51.0mm、幅は20.7mm、厚さは9mm、重さは8.6gを計ります。チャートと呼ばれる石材を用いて作られており、全体に赤紫色を呈し、所々に白い筋状の模様が見られます。

2. 変形論

さて、さらに詳しく、丁寧に観察してみましょう。今度は写真2を見て下さい。写真1に画像処理を施して、より表面の様子を観察しやすくしてみたものです。おもて・うら、どちら側の面にも右上から左下へ筋状のキズのような凹凸があるのが分かりますか？

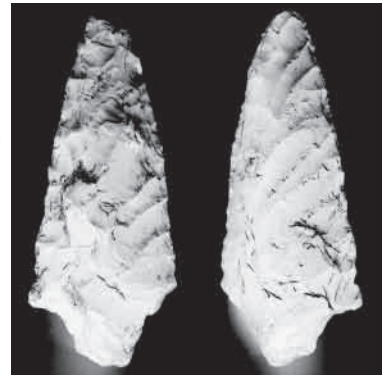


写真2 写真1の資料に
画像処理を施したもの

特に、うら面（写真右）の右半分には顕著に見られます。また、それ以外にも、様々な形の凹凸があるのが分かりますか？

これは、「剥離痕」と呼ばれるものです。考古学では、石・石器の表面から、「破片が剥がれる」あるいは「破片を剥がす」行為の事を、「剥離する」と言い、その結果、石・石器の表面に残った痕を「剥離痕」と呼んでいます。

実は、この「剥離」という出来事が繰り返されて、石器の形は出来上がっています。つまりこの「剥離」の痕＝「剥離痕」を丁寧に観察することで、その石器がどのようにして、今の形に至ったのか、が分かるのです。そこには「作った時」の様子を留める痕跡はもちろん、「使った時」に剥がれたり折れたりしたキズや、あるいは「捨てられてから付いた」キズもあります。

さて、この石器の剥離痕の観察からは、①両面とも右半分には斜めの細長い剥離痕が目立つ、②両面とも左半分には、四角や丸い形の小さな剥離痕が目立つ、③基部（写真下側）が左右非対称、④先端部（写真上側）に、折れたような急斜な剥離痕がある、と言った

ことなどが分かります。そして、さらにこれらの剥離痕が形成された順番(①~④)などを合わせて考えると、この石器に関わる出来事が想定できるのです。つまり、①当初作られ、②・③何らかの理由で左半分・基部を整え直し、④「使用」によって先端が折れた、と言う出来事です。そしてその後捨てられて、地中に埋没し現在に至ったのではないかと考えられます。

さて、最近の考古学は、このように「遺物(=捨てられた昔の道具)の形は、様々な行為・出来事を受けて、変化『変形』して、現在の形になっている」と考えられるようになってきました。この視点を「変形論」と呼んでいます。この視点を考慮すれば、今までの「形」に注目した分析以上に、様々なことが、解明・復元できると言えます。

3. 資料採集地点の様子

さて、石器そのものの観察はこれぐらいにして、今度はこの「有舌尖頭器」が「発見された時の状況」から考えられることを整理してみましよう。

右の地図は、今回石器が見つかった地点とその周辺の様子を示したものです。地図の右下から左上に向かって流れる川が、杣川(そまがわ)です。この川はやがて、右上から左上に向かって流れる野洲川に合流し、西方の琵琶湖に注ぎます。

先述したように、右の図の★印の位置が、石器が見つかった地点です。ちょうど丘陵部から平野部への地形が変化するところに当たります。★印より南側には、丘陵部が舌状に張り出してきています。その右側、杣川へ注ぎ込む支流(磯尾川)が北流しています。

4. 地形変遷史

1) 「河川」の力

さて、問題はここからです。実は、この「川」が曲

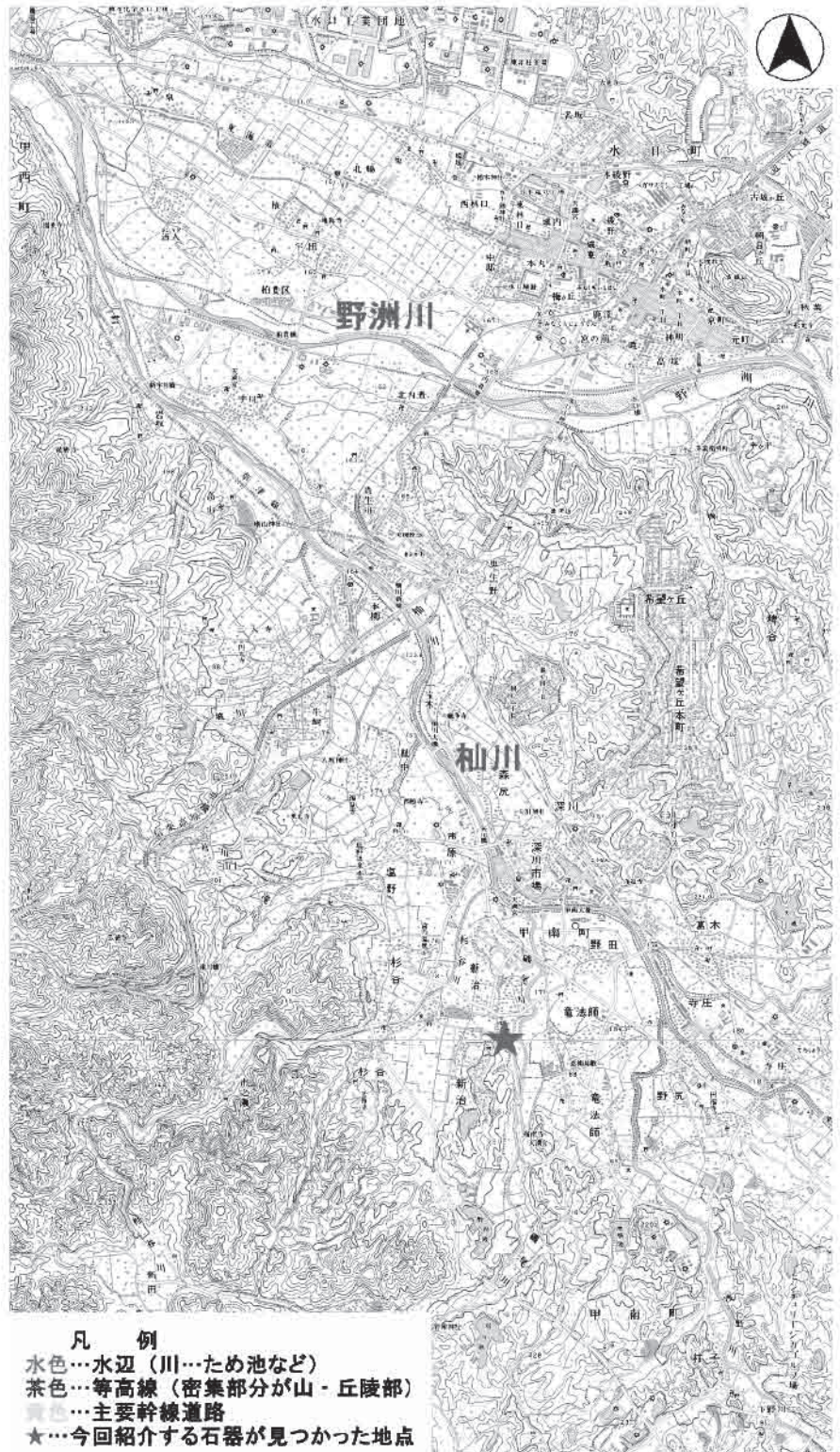


図1 有舌尖頭器採集地点の位置と周辺地形図

者なのです。川は上流から下流に流れるときに、大きく2種類のを運びます。ひとつは「水」、もうひとつは「土」です。「水」については説明は要らないでしょう。問題は「土」です。「川」は、より上流にある山や丘陵から「土」を削り取って、より下流へと運ぶのです。そしてそれは、すべて下流の琵琶湖まで

運ばれるわけではなく、流域のさまざまな場所で、土砂を堆積させながら、しかもさらにその堆積した土に対しても、浸蝕・削平を繰り返し、時には流域の場所・範囲まで変えながら流れていくのです。

当然、土砂を削られた部分・地域では、山や丘陵は低くなり、谷筋ができたりします。一方土砂が堆積した方では、平野・平地が広がっていくという現象がおきます。毎日少しずつ、それははるか昔から、脈々と、文字通り、流れ続けています。その間に削り取られた土砂の量は、計り知れないものがあるでしょう。

2) 「丘陵」の周りで見つかる有舌尖頭器

図2を見てください。この図は、地面の起伏と湖・平野部との関係を示した地形図を基に作成したものです。濃い緑色の部分ほどより高い所（すなわち山や丘陵部）で、薄くなるほど低いところになります。琵琶湖の周りの白っぽいところが平野部になります。薄く灰色の線で示したのが現在の河川です。そして、この地形図を下図にして、県内で見つかった有舌尖頭器の出土・採集地点に、●印を入れてみました。印の横に付した番号は、左上の表の出土地（遺跡）名一覧と対応しています。★印が今回の資料採集地です。

この図を見ると、多くの●印が、そしてもちろん今回採集された地点も、図の右下半、つまり滋賀県の南東部に広がる丘陵部（瀬田～日野・水口～布引丘陵）の辺りに集中しているのが分かります。そして、これらの採集地点は、いずれも緑色の濃い部分（即ち丘陵）と白っぽい部分（即ち平野・平地）との変換点で、隣接して灰色の線で示した河川がある部分である、という共通点が確認できます。

3) 「遺構」の存在

さて、では、これらの有舌尖頭器を使っていた人たちが、この丘陵の周りで生活をしていた、と考えることはできるのでしょうか？先述した状況からは、その可能性が高いようにも思えます。

しかし実は、その状況を示す「遺構」～例えば「有舌尖頭器を作る作業」、「有舌尖頭器を使った狩猟などの作業」の「痕跡」、あるいは「その痕跡が残る場」を、考古学では「遺構」と呼びます～は、この丘陵の周りだけでなく、滋賀県内でも、未だ見つかっていません。丘陵の周りで、これだけの有舌尖頭器が見つまっているのにもかかわらず、です。一体何故なのでしょう。

その鍵になるのが、先ほどの「川」です。この瀬田～日野・水口～布引一帯の丘陵は、いわゆる「洪積台地」と呼ばれる台地が、「河川に削られたり浸蝕されることによってできた丘陵」と考えられています。つ

まり、この「台地」が河川に浸蝕されることによってできた丘陵」の周りで、有舌尖頭器が点々と見つかること、しかもそれは段丘の端・川沿いで見つかることを考えると、一つの仮説が想定できるのではないのでしょうか。

それはこうです。洪積台地上に元々残っていた当時の人々の活動の痕跡（「遺構」）が、「河川」の影響によって浸蝕、削平されていったのではないかと、そしてその結果、有舌尖頭器だけが、丘陵の周りから見つかることになったのではなからうか、という仮説です。つまり「地面が動いた」ことによって、当時の「遺構」は既に消滅してしまった可能性が考えられると言うことなのです。

おわりに

さて、甲南町で見つかった有舌尖頭器を手がかり・きっかけに、考古学の中でも特に、「変形論」と「地形変遷史」という視点に絞って、「遺物」が示す可能性の整理をしてきました。どちらの視点も常に十分に考慮する必要があることは、指摘できたように思います。

しかし同時に、課題も浮き彫りになりました。例えば後段の「遺構消滅」という仮説です。実は、この縄文時代草創期の遺構は、滋賀県のみならず近畿一円でもほとんど見つかっていない、という事実があります。つまり、「遺構が消滅した」のではなく、元々「（瀬田～布引一帯の）台地の上に遺構は無かった」という可能性も否定できないのです。だとすれば、では、一体誰がどのように有舌尖頭器を、この地に残したのでしょうか。

謎は深まるばかりです。しかし、その答えは今後さらに調査が進めば、明らかになる可能性を秘めているとも言えるのです。

なお、今回の資料紹介について便宜を図って下さった、甲南町教委の長峰・林両氏ならびに資料を採集された西村氏に、末筆ながら謝意を表します。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 鈴木康二）

参考・引用文献

- 『滋賀の石器時代』銅鐸博物館（野洲町立歴史民俗資料館）編 1995。
- 進藤武『滋賀の石槍』『滋賀考古 第13号』滋賀考古学研究会 1995。
- 鈴木康二「287. 滋賀県内の石器資料の紹介」『滋賀文化財だよりNo.261』（財）滋賀県文化財保護協会 1999。
- 『縄文時代の石器－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会編 2002。

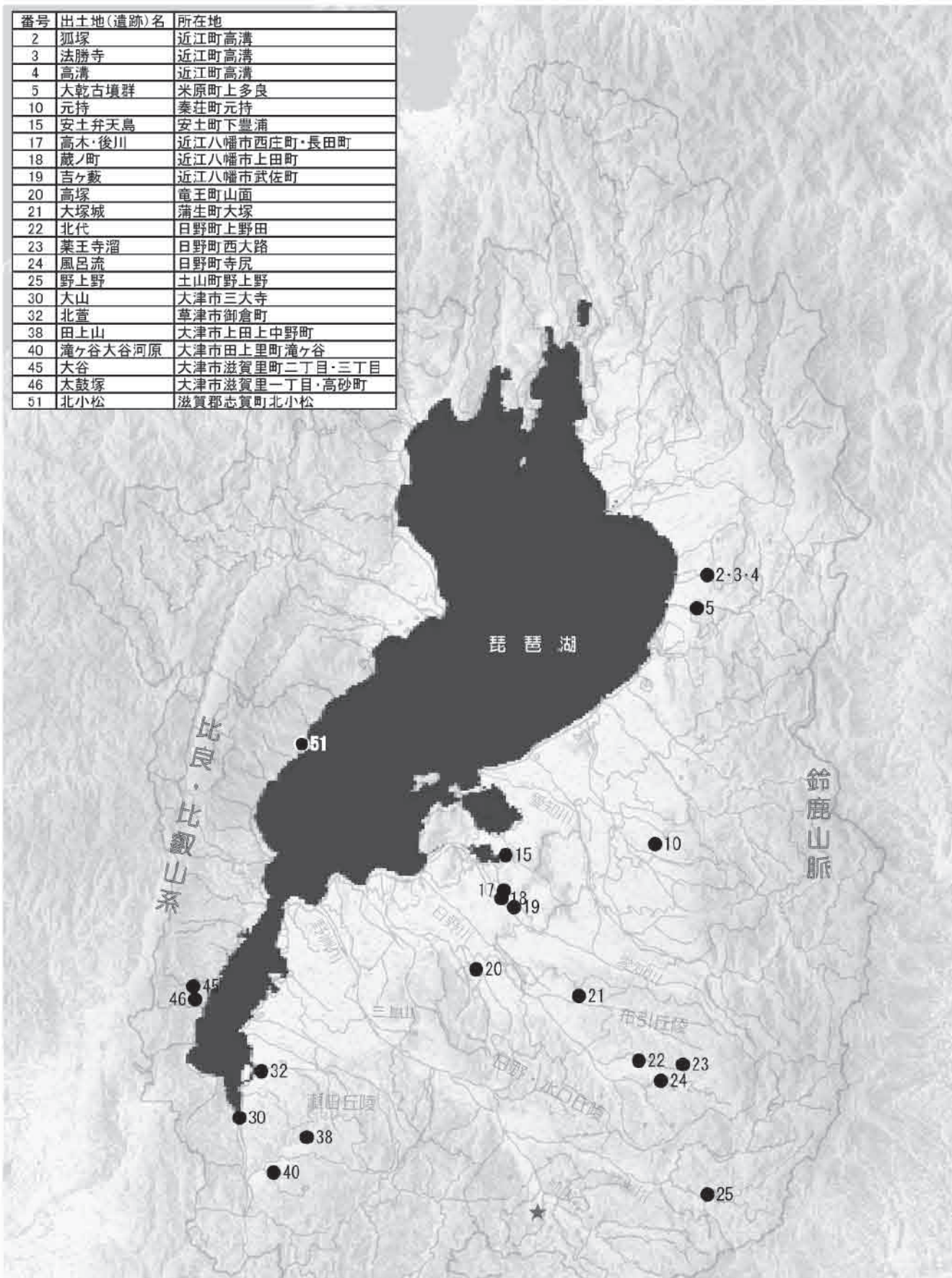


図2 県内の有舌尖頭器出土地点

『縄文時代の石器－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会編、2002。から転載・加筆